

デイス・パーダ ー因果応報の戒律ー

△帝国争乱編▽

作はーしえる師団／のんとみれにあ





レイシア・アルネート暫定少佐

陣営:セロビオス共和国世界連合
イニシエーター協会所属
独立機動部隊レイシア隊の隊長

覚醒者となつてから数百年の時を生き、
宿敵のレイシスと相対してきた。

副官のレフティアよりも成育と実力が
劣っている事に日々悩む。



——世界の多様な文明、言語の壁が瓦解する程の三分極化世界大戦、終結から二百年余りが過ぎた頃。

未だ平和とは無縁な日々が続く世界で、辺境に住まい生き抜く一人の傭兵が居た。

ある日、彼は大戦の勝国陣営である共和国政府から非正規の依頼が持ち掛けられた。それは腕の立つ優秀な傭兵ばかりを集めて行われるという特別軍事作戦であり、破格の報酬金が提示されていた事も相まって、特に断る理由のなかった彼はその依頼を受諾する事になるが……。

その作戦行動中に遭遇したある存在によって彼の人生は大きく一変してしまう。



目次

第一話	あの日、見たもの.....	5
第二話	侵攻の兆し.....	73
第三話	レジオン帝国『ブリュッケン』.....	124
第四話	一人の考古学者として.....	166
第五話	特異。.....	199
第六話	レジスタンス.....	233
第七話	枢騎士評議会.....	269
第八話	特異性.....	287
第九話	枢騎を滅する計画.....	363
第十話	クロナの失脚.....	386
第十一話	アンビュランス要塞撃滅作戦.....	402

第一話 あの日、見たもの

——作戦開始。

傭兵達によって抵抗の術なく散って逝ったであろうこの施設関係者の人物たち。

それらの死体は無惨にも、そこらの通路に無秩序に散在している。

しかし、雇われのプロの傭兵達はそんな事には気を止めず、仮に疑問を抱いても任務の遂行を優先する。

そしてこの、所属不明オブジェクトである衛星軌道要塞の内側を颯爽と駆け巡るのだ。

「——そこだ……あれが中枢センターだ……」

「——ここが概要にあったコントロールモジュールだ。これを引き抜いて施設解体プログラムの埋め込み作業を開始する、そこのお前とお前！通路を警戒してろ」

忠実に与えられた任務を遂行する傭兵達だが。

ここにいた施設職員の様子からして、プロの傭兵達でさえも、さすがに疑念の念を抱かずにはいらなかった。

彼らは武装をしてろくに抵抗してこないどころか、警備兵の一人や二人くらい居てもおかしくはなかろうに、そんな人影すらそもそも見当たらない。

感情を押し殺し、ただ彼らを始末する。

やがてしばらくすると、一人の断末魔が通路から聞こえてきた。

「――何事だ！？」

その場の傭兵達は一斉に元来た道を振り返る。

「――どうした？！状況を報告しろ！」

侵入口の警戒を担当していた傭兵部隊から一切の応答がない。

「くそっ、何が起きてる！？各隊通路を警戒しろ！なにか来るぞ！」

その傭兵達の視線の先、行き当たりの通路から大柄の人影のようなものが現れる。

「――なんだアイツは……」

暗闇の中から現れたそれは、重装甲を思わせる装甲服と、それを包むように大柄のローブを体に羽織っていた。緋色に輝くフェイスアーマーから覗かせた瞳のようなそれは、まさしく人の命を容易く刈り取る死神のようだ。

その手には実用性を感じさせない巨大で重厚な大鎌、その得体の知れない漆黒の人影に対し、傭兵達はその存在の推察を直ちに中止して直感する。

傭兵達の下した判断は長年の傭兵稼業の経験から選定された迅速な判断だった

「――各個距離を取れ！間合いに近づけさせるな！」

ローブを纏ったその漆黒の存在は、傭兵達に向けて、装甲に包まれたその手をかざす。

「――なんだ……なにをする気……ぬぁあつ？！」

前に出ていた数人の傭兵達の上半身が蒸発でもしたかのように消えていく、その有様に後ろの傭兵達は為すすべ

もなく、絶望に打ちひしがれ地面に倒れこむ。

その場に居合わせていた一人の傭兵レオ・フレイムスは、その惨状を見届けるこの場の傭兵たちの一員として、同様に立ち尽くす事しかできなかったのだ。

そして最後に、その死神はレオに告げる。

「レイシスの

——世界は争いの絶えない日常で混沌としていた。

つかの間の平和は訪れず、世界のどこかで常に戦いが起きている。

車窓の外を見れば大破した機械軍の無人兵器が散在しているし、民間人や共和国兵士の死体も見かけるのが普通というもの。

まあそれもそのはず、今この列車が走行しているここらの地域一体は機械軍と国境を接する共和国南部戦線【バスキア戦線】の迎撃城塞が立ち並ぶ外側の領域、未だ共和国軍による手が及んでいないのも仕方がないというもの。

だがここはもう紛争跡地、時期的には死体処理や大破した機械軍の兵器の清掃もだいたい終わっていてもいいはずだが、この惨状を見る限りに置いてここが片付くのは当面の間まだまだ時間がかかるだろうに思えた。

耳障りの悪い機械の軋み音が列車内の空気を伝わる。

今乗っている砲塔付の列車、いわゆる装甲列車は元々軍事的利用の為に使われる予定の代物だったが、この地域で戦闘が予想以上に早く終結した為にただの一度も実戦に使われることなく、こうして民間の強靱な輸送手段とな

る盛大なギャグを披露している。

ふと列車の車内からは興味深い会話が聞こえてくる。

「――ふう、こりやすげえ有様だわあ」

「――ここまで機械軍は攻め込んでいたのかね、南部で聞いてた話とはまるで違うな」

「――居住区もかなり被害を受けたようだし。こちらの復旧にはしばらく時間がかかるだろうなあ」

「――てか、聞いたか？住民の何人かあの機械どもに拐われたんだとよう」

「――あん？うそだろお？今更とっ捕まえて何しようって気なんだかね」

「――だよなあ、人を拐ったところで今更なにかメリットがあるとは思えないなあ、人質にするにしても共和国政府様には通用しないことはもう分かりきってるはずだしな」

（ほう：機械軍が人拐いか。）

今までそんな話は聞いたことがなかった。

今更人体の解析でもしようとしてるのか？そんなはずがない。

なぜなら機械軍は元々共和国の兵器であり、尚且つ統括プロトコルサーバーを管理していた連中だ。

人体の弱点や有効な毒ガスなどを今更調べる必要がない。それと捕虜にするなど人間相手ならありえなくもない話だが、機械軍がそんな事を今更するとは考えにくい。

なぜなら機械軍は共和国を独立してから数百年余りの時が流れているからだ、今になって何を人間側に求めると

言うのか。

——しばらくすると共和国第Ⅱセクター中央ステーションに到着した。砲塔列車の荷物保管室から自分の荷物を受け取ると、事前の打ち合わせにあった作戦会議センターに向かった、そこが目的地だ。

ステーションの外に出ると街並みが見えた。いくつもの想像を絶する高層の建物が立ち並び、自分が元居た辺境と比べてその余りに発展した風景からは、まるで戦争などなかったかのような確かな平穏がそこにはあった。

その光景はどこまでも美しくいつまでも見ていたいと思わせる程に豪奢である。これはある種のカルチャーショックとも言えようか。

この都市部だけでも人口は恐らく数億人はいるだろうか、このステーション自体が高層の位置にある為、下の街を一望することができた。見るとこ全てに人が居てとても賑やかだ、自分がこれまでに見てきた光景とは裏腹に人の温もりを感じる事ができる。大都市とはなんとも温かい場所だ、往々にして文化の発祥地であり、ここに人が集まりたがるのも分かる。

しばらく歩き会議センター付近に到着すると、入口に同じ生業らしき人の集りができていた。傍から見ると随分と不衛生な印象を抱く連中だ、まあ自分もそんな連中と同じ部類の人間ではあるのだろうか。

施設に近づくと見張りの共和国兵士が声をかけてきた。

「正規採用の傭兵か？所属組織コードと作戦コードの提示を」

「ああ…分かった」

作戦参加用に事前に支給されていた端末を提出する。

すると、その兵士は手に持った自前の大型の端末に提出した端末をはめ込んだ。

「作戦コードの認証が完了した、このまま先に進み、上層の会議室に向かえ」

「どうも。ああそれとあの人集りはなんなんだ？俺と同業者のように見えるが？」

「ん？ああ、あれは先日不採用になった傭兵達だ。高額な報酬故に引き下がないんだよ、馬鹿な連中だ」

その兵士はやれやれとした様子ではめ込んでいた端末を取り出し、それを返す。

「ふーん、そうなのか。じゃあ俺はらっきーって事かな」

そうわざとらしく声を大きく言うと、彼らに睨めつけながら会議室の方へと向かった。

——会議室に着いた。

会議室は広々としていた。特に座席の指定もなさそうなので、そこら辺の席にとりあえず座る。

（しかし思ったよりもステーションから距離があってけっこう疲れたな……）

しばらくして作戦に参加するであろうガラの悪い傭兵達がかなり集まって来た、ようやく会議が始まりそうだ。

以前の打ち合わせはあったが、作戦概要はその場では話されなかった。その為作戦内容は初めて聞くことになる。

しばらくすると、年端も行かないような風貌の少女が前の壇上に立った。

「ほう……これはなかなか……」

作戦概要を聞きに来ていた傭兵たちが騒めく。

二つに結んだ白髪のを靡かせ、少女のように幼い顔立ちはまるで子供そのもの。

（こんな女の子が何故こんなところに……）

前に立った少女は一息おいて胸をはり、口を開く。

「初めまして諸君。私はレイシア・アルネート、少佐だ。まずはこの作戦に参加してくれた諸君等に敬意を表す。本作戦が非常に危険な任務であるのは事前に承知の通りだが、もし作戦を離脱するならば今の内だ。本作戦の概要を聞いた者は如何なる事があるかと作戦から離脱する事を許可できない、もちろんこの作戦を限られた者たちに持ち掛けたのは諸君等の実績があつてこそだが、心変わりした者がいるのなら退くとしてこのタイミングを置いて他にはない」

彼女がそう言い放つと周りが騒めく。

「少佐だと……あれでか？」

「あの年端もいかなさそうな女の子が？軍部も落ちぶれたもんだ」

「あの見た目で随分物騒な事を言うねえ」

部屋のだれもが少女が弁舌するその状況に動揺しはじめるが、その場去る人物は居ない。

まあ当然のことだろう。

彼らはまがりなりにも数多の戦場を生き残り、場数を踏んできた歴戦のプロフェッショナルなのだろうから、そもそも生半可な気持ちで依頼を受けてはいない。

「うむ、勇敢な諸君等に敬意を表す。では話を続ける」

——その少女から作戦内容は話された。

それは突如として現れた共和国領上空 120 km 付近の衛星軌道上に停滞するように現れた所属不明の衛星光学兵器と思わしき巨大な旧世代オブジェクト。

それが現れてから数週間が経っている。

任務はそのオブジェクトに我々傭兵部隊はわざわざ乗り込み、その施設を無力化するという単純明快なもの。

その大きさ故に夜間などは僅かに残った太陽の光で反射されたそれが目視で見える事が出来るが、それを見た国防に無知な国民達はすっかり怯えてしまつてちよつとした騒動になっている。

先程も言つたようにあのような衛星砲とも呼べるようなオブジェクトは旧世代の遺物と化している、今となつてはそのような兵器でさえも現代の国防システム【エイジシステム】にかかればなんてこともないものだ。

——作戦の全容を明かされた後も、傭兵たちは一人も離脱することなく後日の作戦開始日に備える事となつた。

あれから〇ヶ月程が経っただろうか。

気づけばもう夕暮れだ。目覚めたのは約一時間くらい前。

生活リズムが完全に乱れきっていた。

重い体を起こし、部屋の隅に置かれた冷蔵庫に手を伸ばす。

冷えきったアルコール飲料を取り出すと、近くのシーツが無惨に剥がれたボロボロのソファ―に腰を掛ける。

(そういえば、最近寝てばかりだな)

いまのところあれが、俺の傭兵家業で最後の任務だ。

それからは何もせず、ただ呆然と日々を過ごす。素晴らしきかな新しい日常だ。

あの作戦、生き残ったのは俺だけらしい、他の傭兵はみんな死んだとか。

俺たちは反撃する暇もなく理不尽に殺されて、俺だけが生き残っていた。

摩訶不思議な話だ。今となっても何故生き残れたのかは分からない、確かなのは俺はあの後、与えられた施設の自壊プログラムを始動させ、他の傭兵達と共にあの黒づくめのアイツに立ち向かったという事だけだ。

そして、奴は自分が意識を失う前の最後にこう言っていた。

「レイシスの子……」

俺がその言葉を思い出しながら口はその言葉を出すと、何の因果か玄關のドアがタイミングよく叩かれた。

品のあるノックが室内に響き渡る。

（なんか、頼んだっけな）

レオの住居は、共和国南部戦線『バスキア戦線』の更に向こう側。

共和国の経済圏からしてみれば、辺境に位置している。

宅配など、頼んだところで届くのは数か月後がザラだ、故に過去に頼んでいた発泡酒やらのネット注文が今頃届いたのかもしれない。

しかし、これだけ世の中が便利になって身の回り品の確保など不自由しない時代になっっているながら、何故未だに辺境からの注文に關してだけは進捗がないのか。

いや、そうではない。進捗は確かにあった、だが同時に《衰退も》したのだ。

それは機械文明とある種の決別が、今の歪なハイテクノロジー社会を生み出した。

ハイテクノロジーでありながら、どこか原始的な人類社会。

随分過去にあった人工知能による、アステロイド配送サービスなど、レオが生まれる以前にしか存在していない伝説の宅配サービスだ。

今となつては、しっかりと人の手から人の手へと、その荷物は紡がれていく。

レオはドアを外側に押して、扉をゆっくりと開ける。

「はい……どちらさま……？」

恐る恐る声を出しながら、その訪ねてきた人物を目視する。

すると、そこには軍服と軍帽を身に着け、白銀の髪を靡かせた見覚えのある『少女』がそこに立ち澄んでいた。

その少女は、こちらを軍帽をあげながら視認すると、整然と言葉を放った。

「こんにちわ、私は共和国軍参謀本部から特任で参った【レイシア・アルネート】少佐だ。貴殿は【レオ・フレイムス】……で合ってるかな？夕暮れ時にすまないが、以前の君が遂行した任務について確認したいことがあつてね」
(共和国軍参謀本部だと？わざわざそんな所から……今更何用だ？)

「あつああ……ええと……」

ドアを開けると、そこにはもう一人、ショートヘアの茶色の髪をした女性軍人が居たことに気づいた。レオは思わずその女性をまじまじと見つめる。

「――あの、なにか？」

レオが見つめていたその女性は、そう言葉を放つ。

「あつ、いや……」

久しぶりに女性を見たからか、つい惚けてしまっていた。

その光景をみて、隣に居たレイシア少佐は微笑している。

レオは見覚えのある少女の方へと目を向け、頭を軽く抱えながらその少女の事を思い出す。

「えーと……たしか貴方は……」

レイシア少佐はレオと目が合うと、軍帽を両手でゆつくりと外す。

「憶えているだろうか？」

その問いに、健気さを感じ取ったレオは思わず反射で言葉を出す。

「もっ、もちろん！ええーと、あれですね、確か【星屑作戦】の時の……」

レオは最後に共和国第「セクター」に訪れた時の事を鮮明に思い出した。

「覚えていてくれたか、それは結構。ところで、中に上がらせてもらっても？」

レイシア少佐はそう言うと、ひょいと背伸びをしてレオの背後の部屋の中を少し覗こうとする。

「えっ、あつ！！ちよつーとまってください！！今少し片付けるんで！！！」

そうレオはこの場に言残すと、扉を閉めすぐ様部屋に飛び戻る。

缶類の飲みかけや、いわゆる如何わしい本等をまとめてゴミ袋に突っこみ、奥の部屋隅に放り投げた。

やがてレオは簡単に清掃を終えると、再びをその扉を開け彼女たちを招き入れた。

レイシア少佐は部屋にはいるなり、辺りを見渡す。

「かなり時間がかかったようだけど、なにか見つかったらマズいものでもあったのかな？」

レイシア少佐は、ややにやけた様子でそう言った。

「いやいや！そんなことはないですけど！ただ、人が我が家にかかるのは随分と久しぶりなものでして……とても人に見せられないほどゴチャゴチャしていただけですよ」

レオはそう言う、レイシア少佐に連れ添っていたもう一人の女性がレオの前へと出てくる。

「――どうやら我々が思っていたよりも元気そうですね……。あなたが最後に帰還したあの時は、会話も出来る様子ではありませんでしたから……」

その女性はそう言う、レオは妙に勘繰り触った。レオはとつと話を済ませようと、単刀直入に彼女たちの本題へと切り込む。

「――それで……。俺の様子を見にきたにしても、約三ヶ月近くも期間をあげて来るって事は、どうも単純な聞き取りってわけじゃなさそうだが……？」

レオはそう言う、レイシア少佐ともう一人のその女性は目を合わせる。

「さて、どうかな……。まずは席にでも着いてから、ゆっくり話そうじゃないか」

レイシア少佐はそう言う、近くにあった手頃な椅子に小さな体を乗せる。

レオはそう言われると、とりあえずその場にあったテーブル椅子に座る。

「ただの『よろしくやってるかどうかの』挨拶だとしても？あなた方はわざわざ何をしにここへ来た？」

レオはあくまでも鋭く、彼女たちに問い詰める。

「ふむ、そうだね……。逆に君こそ、なにか私達に聞きたいことがあるんじゃないかな？」

レイシア少佐は軍帽をテーブルに置いて、そう話す。

「んん……？」

(心当たりがない……)

するとレイシア少佐は意外そうな顔をする。

「ほう、君はあの作戦の事について何とも思うところはなかったのか？」

——忘れかけていた屈辱と絶望。そして引つ掛かる数多の出来事。

何故、今の今まで忘れていたのか。

レオは何か記憶の封印でも溶けるかのように、あの時の鮮明な記憶が蘇る。

「——あの要塞……見かける職員は全て非戦闘員だった。武器の一つも持っていなかった、だが俺達は任務に従って抹殺した。あなた方は、あそこには非戦闘員しかない事を知っていたのか？」

レオはそう聞くと、一呼吸。間を空けて少佐は答えた。

「知らなかった」

レイシア少佐は短くそう答える。

「そう、か……。あそこには……、暗いローブに身を包んだ、とても大きな鎌を持った奴が急に現れたんだ……。あれに他の傭兵はみんな殺された」

何度もフラッシュバックするあの光景はやはり信じられないものだった、あれは一個人の生命体が保有するには

余りにも強大過ぎる。

「アイツは最後に俺だけを殺さずにある言葉を言い残していった……『レイシスの子』と」

「——レイシスの子……か……」

レイシア少佐は怪訝な顔をしながら、小声でそう復唱する。

「あれは……一体なんなんだ？ 培ってきた経験や知識が通じないような……、何かが生物として根本的に違う。奴と俺にある、明らかな壁……。そんな感覚を、俺はあそこで味わったんだ……」

少佐はうつむいたまま、レオの抽象的な語りを静かに聞き届けた。

「——あれは、この世に居てはいけない存在だ。あんなものが存在していいわけがない、あんな理不尽なことがあつていいはずがない……！ あんた達はアレについては何か知っているのか！？」

レオの張った声に動揺する素振りもなく、一間置いてレイシア少佐が口を開いた。

「君が求めている答えを、我々は知っている」

あんなものが本当に実在するとか、せめて幻覚であつて欲しいと、レオはそう願っていた。

かの存在に対してまるで無力であつたという印象を強く抱いていたレオは、傭兵としての矜持を、奴が存在するだけで踏みじられてるように感じていた。

レオはかつて、国際的な民間軍事会社である【センチュリオン・ミリタリア】の地方傭兵組織支部にて【戦略傭兵隊】に抜擢されるほどの腕前と実績を持つ、ベテランの傭兵だった。

彼がベテランの傭兵である由縁は、その優れた身体能力もさることながら、現場での戦術レベルの思考能力に非常に長けていたからだ。

その彼の戦術立案における大前提として、如何なる人間であろうと、例え世界一の兵士だろうと撃てば死ぬ。それが全てだ、それはどうしたって覆らない大原則のはずだった。

だが、現実には、実はそうではなかった。

レオの中の大原則は、たったひと時であつという間に全て崩れさつた。

その身に秘めていた傭兵としての絶対的な自信は、虚像の上に成り立っていたものだと思つた。

レオを支えていた哲学は、その時に崩壊したのだ。

「知っているのか……奴はなにものなんだ……？あの力は一体なんなんだ……？」

レオは答えを急かすように話す。

「まあ待て、まずは我々のところに来てくれないか？」

レイシア少佐のその言葉に、レオは一瞬困惑する。

この子は何を言っているのだろうか。

「君が聞きたがっている話は、我々の所に来てくれさえすれば、いくらでも話してやる。その気があるならばついてくるといい」

レイシア少佐はそう言うと言席を立ち、そのままあっさりと外へ出ていった。

「いつ、一体いきなり来るなり何なんだ……？」

レオがそう言うのと、もう一人の付き添いで先程からずっと立ちっぱなしだったその女性軍人は、長らくの沈黙を破り、レオの目を見て話をかけてきた。

「——えーと、そういえば私の自己紹介がまだでしたね。私はミーティア・ミルクオーラム中尉です、以後よろしくお願いします」

ミーティア中尉はそう名乗ると、レオに対して礼儀正しくお辞儀をする。

「あつ、ああどうもこれは丁寧に……自分はレオ……レオ・フレイムスです」

レオもそう名乗り返すと、ミーティア中尉は突如目を輝かせた様子でレオを見つめる。

「はい！それでレオさん！是非うちのところにきてくれませんか？あなたのような英雄が来たらきつと大騒ぎです！！！」

ミーティア中尉の、先ほどの態度の変わりようにレオは目を見開く。

「え、英雄？……それにうちのところってどこ……あつ、ちよ、ちよっと！」

ミーティア中尉はレオの手を無理やり掴みながら外へ連れて行くなり、彼女たちが乗って来たとされる重甲な装甲車両に、レオは押し込められた。

（おいおい……、ほとんど強制連行みたいなもんじゃないか、てか俺普段着だし……しかもこの人……見た目からは想像もつかないほどの握力だ……）

ミーティア中尉の手を振りほどくのは困難だ。

なにか特別な訓練でもしているのかと疑ったが、ここは変に抵抗するよりは大人しく従った方が身のためになり
そうだと、レオは判断する。

そんな思考を巡らせているうちにレオを乗せた車両は目的地も聞かされないまま、すぐに走り出した。

「あ、あの。これから一体どこへ？それに英雄って一体なんのことなんだミーティア中尉殿？あまり身に覚えがない
のだが……」

そう言うと、ミーティア中尉はすぐ様に反応する。

「あれ？知らないんですか？巷では未知の空中要塞の脅威から都市を守ってくれた英雄としてちよつと前に話題に
なってたんですよ！」

ミーティア中尉はウインクをしながらそう言うと、レオの手を遂に放す。

「え、嘘でしょ……？」

まさかそんな事になっていたとは。

——ここ三ヶ月。レオはずっと自宅に引きこもっていたというのと、ネットは映画や何かしらの動画を見るに時間
を膨大に割いていたので、ここ最近のニュース等の外の情報は殆ど知りえていなかった。

引きこもっていた理由として、例のあの星屑作戦以来、精神的に無気力状態になっていたというのもあるが、単純
に外に出る必要がなかったからだ。

あのあと事前の契約通り、莫大な報酬がレオの口座に振り込まれていた。

レオの哲学が通用しない存在と、金には暫く困らない実情のダブルパンチにより、レオは鬱にも似た無気力状態になってしまったのだ。

彼女たちは、俺がここ三ヶ月の間も精神的に深刻な状態だったとも思っているのだろうか、そんなことは余りなく、確かに帰還直後の記憶はあの覚醒者野郎にかけられたプレッシャーのせいや曖昧で、精神的な異常を抱える日もあった。だがそんなものは無気力の精神状態のせいや初めの数週間で消え失せた。

英雄だのなんだの、褒められるようなことは何もしていない。俺は唯、任務とは言え無抵抗の職員を殺して雑に生きて帰ってきただけの凡人だ。

行ない自体は子供に出来るような事であって、俺である必要はない。

（まあ、労ってくれていることだしそれは別にいい。しかし、まさか世間で英雄扱いされていたとは割と驚きだ。傍から見れば、俺の成し遂げたことはそれなりの偉業であるようにも見えるんだろうか？それに俺以外の選りすぐりの傭兵達が生きて帰ってこなかったことを考えれば、確かに英雄っぽくも見える）

「ええ、ですからうちのところの子もきっと大喜びすると思うんです！ああーもう今からでも反応が楽しみです

う！！！！」

ミーティア中尉は一人で勝手に盛り上がっている。

「ええと、うちのところってこのことなんだ……、貴方達は俺をどこへ連れて行く気なんだ？」

その問いに対して返答であるかのようにミーティア中尉は満面な笑顔をレオに見せるが、答えてはくれることはなかった。

ふと分厚い装甲車両の網が掛かった窓から景色を見ると、この辺は既に都市部近くに来ていることが分かった。

そこはただただ、広大に広がる住居区と格差を表すかのような高層ビル郡とメガストラクチャー。

住居区には南部戦線から逃れてきた人たちで溢れて定員を遥かに上回っている。

南部戦線は長らく機械軍の脅威に晒されており、機械軍が共和国を離反してから数百年が絶った。

大きな戦争はないものの、その間もずっと紛争が続いている。

つい最近までは、バスキア戦線の迎撃城塞に小規模の機械軍部隊が進行してきていたが、迎撃城塞が容易く撃退していた。

今となつては、軍事力を着実に増し続けていると言われている機械軍に対して、これといった対抗策が立案される事はなく、潜在戦力を鑑みて、機械軍の現在は共和国軍と拮抗状態にあるとも言われている。

それ故か共和国を含めた人類圏は、いまだ機械軍に取られた領域を取り返せずにそのままにいる。

——共和国は東西南北の脅威に対して備えなければならなかった。

南の機械軍アステロイド、東西のアルデラン卿国、そしてかつて世界の全てを侵略する一歩手前まで迫ったガンレイ大帝国の継承国家、北のレジオン帝国。

卿国とアステロイドに関しては、元々自国軍自国領であったのだから、この惨状で敵国に囲まれているなど実に皮肉な話だ。

レオはそんな事を考えていると、気づけば目的の場所についたようだった。

場所的には第七セクター都市圏からはそんなに離れてはいないだろうが、樹木が生い茂る自然に溢れた静かな場所だ。

車両から降り、しばらく歩くと賑やかな子供たちの声が聞こえてきた。

するとやがて、遊具で遊ぶ子供たちが視界にはいつてくる。

「ここは……？」

「そうだな、児童施設に併設された我々の隠れ家みたいなところだ」

レイシア少佐は子供たちの世話係に軽く会釈をする。

レオはレイシア少佐の後にそのままついて行くと、今ではお目にかかることのないような形式の古い門を開け、施設の中に踏み入る。

中は外観とはイメージのことなる近代的な内装で、ミーティア中尉は窓張り近くに椅子を引き、外の子供たちを眺

められる位置に座った。

そしてミーティア中尉にこのテーブルの近くに座るよう手招れる。

全員が座ってからしばらくして、レイシア少佐が最初に口を開いた。

「さて、まずは【レイシス】について話すでしょうか」

——少佐はレイシスと呼ばれる存在についてレオに口を開く。

「君が要塞で会った『レイシスの子』とやらと意味深な事を言い残したその人物についてだが、おそらく我々が認知している人物と同一のものだろうと考える」

「はあ、あれは……幻じゃなかったか」

レオは愕然且つ疲弊とした様子で体の力を抜き、上体を脱力させ前傾させると、その後手を額に当てる。

「まあそういうことになるかな、そのような存在を我々は、覚醒者。もしくはディスパードと呼称している。もう少し詳しく言えば、それらは何らかの激的なきっかけで、もしくは先天的に未知数の粒子『ヘラクロリアム』を超越的に司る者達だ」

「——ヘラクロリアム……？それって俺たちの体とか、この周りの空気とかに普通に存在してるやつだよ……？そんなもんに特別な力があるってのか……？はっ、それこそ信じられないな。そんな魔法みたいな話、それにやはり、あれがとても人間に操れる力とは思えない。あんなものが人間にあったら世界はとっくに滅んでいるだろ」

「貴殿の言う通りだな、いきなりこんな話。歴史を学ぶことの少ないこのご時世、一般常識の範疇で常人に理解出来

るはずもない。そしてたしかに、かの力は人の身にとつては余りにも強大すぎる力だ。まあだが、そこまで卑屈に考えることもないだろう」

そういうと少佐は足を組み直し、机に乗せた腕で頬をつく。

「なぜだ……？人の身ではとても敵わないような存在が、この世にあるって言うんだぞ？」

「まあ考えてもみる。そのような奴らが古来から跋扈していたとして、何故今になってもこの情報化社会の中、お前たちの間では噂レベルで知り得るか怪しい存在でしかないのかをな」

少佐のその言葉に、レオは目を細める。

「結論としては簡単な話だ。遍く全てのデイスパータ達が悪者とは限らないということだ。古来より正と負、両極の均衡がお互いで相殺し合うように大きく秩序を乱すことがないように務めてきた事、そして表舞台から姿を消してから数百年の時間が流れてしまっているということや、大多数の人々に歴史を学ぶ機会が無いことも大きな要因と言える」

「……ええと、つまり。奴のように、また対になるような存在がいて、それに俺たちはずっと守られてきたから、直接知る余地がなかった……ってとこか？」

「まあ、大局的には概ねそんな感じの認識で問題ないだろう」

レオはそれを聞くと、再び頭を抱える。

「そうか……それもまた信じ難い話しだが……」

レオが言葉に詰まっていると、少佐は話を切りだす。

「そこでだが、君に頼みがある。我が共和国軍独立機動部隊・レイシア隊に入隊してほしい。君のようなデイスパーダとの交戦経験を持つ傭兵は貴重だ。私はそういう人材を積極的に採用している」

少佐に部隊への勧誘の話が突如持ち出される。

「おお、こりやまた随分唐突な」

——少佐は俺を都合のいい手ゴマか何かにしようとしているのか、目的は分からない。分からないが、自分の中の失われていた戦闘意欲的好奇心が再び叫んでいるのも事実としてある。

何故だが分からないが、少佐にその勧誘の話を持ち出された瞬間、俺の体はあのレイシス。奴との再戦を望みはじめていた。

結局どこまでいっても俺は生まれながらの戦闘民族なのだろう。

過去にレオが居た辺境の孤児院、機械軍の斥候部隊の襲撃に為す術のなかった孤児院で、幼少だったにも関わらず、大人たちが怯え隠れる中で俺は唯一抵抗し、倉庫に居た一体の軽装機械兵を傍にあつたトラックに乗り込んで咄嗟

にアクセルを踏み押しつぶした。

その後すぐに、通りがかりの共和国軍が駆けつけてきて、機械兵を撃退し孤児院は一時的に救われた。そこで出会った共和国軍兵士との交流を経て、その姿に憧れ、戦闘をする事への高揚感と共に俺はいつしか共和国軍の軍人を目指しはじめた。

その為に地方傭兵組織に加入してミリタリア社のプログラムである基本訓練課程をこなし、簡単な任務を着実にこなしては実績を溜めていった。

組織の推薦でそのまま共和国軍への正式採用を経て順風満帆に共和国軍人になろうとした。が、傭兵の任務をこなしていく内に、共和国が如何に腐敗し、乱立した軍閥同士での内戦が繰り返されてるかを知った。

何故なら幹旋される任務の内容はいつも企業間紛争や軍閥の内戦に関するものばかりだったからだ、そうして俺は共和国軍人をいつしか志す事をやめた。

だがこの時、俺は戦線から離れた内地のセクターに異動して安寧の日々を過ごすことも出来た。だが、そうはしなかった。

青年期を傭兵稼業で過ごしてきた弊害か、日々の安全な日常が退屈で仕方がなかった。自分の考えた戦術や会得した体術が有効に作用するか、そんなことばかり考えてろくな娯楽すら知らない体になってしまっていた。

金の有り余る生活は俺には合わず、所詮自分は泥沼な戦場に己の存在価値を見出してきたどうしようもない人種、そうせざるをえなかった人間。

俺にとって戦いのない日常など、それこそが非日常ですらある。

だから、この少佐の誘い話は願ってもない話だ。

未知の世界に踏み込み、俺はその世界を見たい。新たな戦場を。

「――しかし大きくでたな少佐、言つとくが生き残ったって言っても、別に奴と互角に戦ったわけでもなく奮闘したわけでもない。ただ、何の間違いか奴に生かされた。それだけだ。俺にできる事と言えば、今まで通り戦うことくらいだぞ」

「それは問題ではない、これは意志の問題だ。君からは奴と再び交えたいという意思を明確に感じられる。それに、傭兵業じゃ随分色んな作戦で戦果を上げていたようじゃないか。そんな人物が来てくれれば我々も尚更心強いよ」

レオにとって特に断る理由もない、ないが。レオはもう少し探ろうとする。

「それで、俺が入るとしても、メリットはなんだろうか？」

「メリット？まあ、そうだな……」

少佐は頭を悩ませるようにしばらく間を空けてから答えた。

確かに俺は端的に言つて戦いを求め、傭兵稼業をしている。だがあくまでこれは俺の為の戦いなのであって、共和国軍のような崇高な使命をもって戦いに挑む兵士とは訳が違う。これは、兵士とは区別してもらいということを示唆

した問いだ。

「独立機動部隊レイシア隊は、軍とは別個の独立した私の為の部隊だ。私設部隊だから規則は緩いし、福利厚生も特段手厚いぞ。あとは……食料に困らず、寝床もあつて。崩れ切った生活リズムを正すことができる。武器弾薬には困らないし、うむ。悪い話ではないだろう」

なんとも魅力的なお誘いだ、俺が無知な人間でなければあつさり鵜呑みにしていた事だろう。はたまた、地方の間だと馬鹿にでもされているのか。これは、聞いたところではただの公務員の通常の待遇だ。

「いや……」

「ん、不満なのか？」

不満ではないが現状のその話に乗ることのメリットと言えば、然程ない。なぜなら提示した例の殆どは既に自前で謳歌している事だ。

「それは、メリットとは呼べないでしょ」

少佐は啞然とした顔をする。

「ん。いや、問題ない。どうせろくな生活をしていないんだろう。なに、深く考えることもあるまい。新たな新生活をスタートさせると思えば、な？どうせなら充実した戦場ライフを送りたいのだろう？孤独な生活はやめて、我らと共に歩もう」

偏見まみれの言葉を羅列し、そういつて少佐は今までの落ち着いた表情からは想像のつかないような笑顔で手を差し伸べた。

となりのミーティア中尉も「さあ」と言わんばかりに見つめてくる。

（ハニートラップにもで会っているかのようだ）

家族の顔もろくに覚えていないし、仲間意識など要らないと思っていた。

だが、三ヶ月にも及ぶ無職期間を経て、久しぶりに組織の一員として共に歩んでみたいとも思った。

少しは俺の人生にも華が咲くなら、乗ってみるのも悪くないかもしれない。安易な考えだ、だが複雑に考えるような人生でもない。これでいい、どうせ碌な人生などでは鼻からしないのだから。

「まあそうだな……俺でいいのなら、その話に乗りますよ」

そう言っ、彼女の手を取った。

「交渉成立だ」

レイシア少佐は俺の手を軽く握り優しく離すと、振り返って歩き出す。

そして。

「――ああ、そうだ」

「ん、なんだ？」

少佐は少女早々の眩しい笑顔でこちらに顔を向かせる。

「君の膨大な報酬金、喜んで我が部隊の資金として活用させてもらおう」

一回立ち止まった彼女はそう言ってまた振り返って歩き出した。

見たことのないような笑顔で。

「もしかして、俺って金目当て……？」

レオはそう言うと、ミーティア中尉が慌てて取り繕うとする。

「そ、そんなことないですよ！あなたの実績や経歴をちゃんと調査して我が部隊に迎え入れたんです！お金目当てなんてととんでもない！！」

ミーティア中尉は必死の形相でそう答える。

その後、レオはこの施設に泊まることとなった。

ミーティア中尉に部屋を案内されると、そこは思っていたよりも快適な空間が広がっていた。

ダブルベッドに、小さな個人用冷蔵庫に最新機種のホログラムTVまであった。このホログラムTV、元は軍用の作戦指令室にでも置かれていたような代物であったが、それが最近になって民間にも流れ出てきた目新しい技術だ。網膜投影型の仕組みであり、専用のコンタクトを取り付けて実際の景色と連動した立体感のある映像を楽しむことが出来る。

軍事的な場面では、高級将官のような人物達がリスク無き現地偵察の手段としてや、兵士たちの仮想実地訓練等で使われた。

「まるでそこら辺のホテルの一室だな」

レオがそう言うのと、ミーティア中尉は安心したような顔で胸に手を当てる。

「気に入っていただけたようですね！では早速、業務の方明日からよろしく願いますねレオさん！では失礼します！」

「あっ、ああ。ではまた明日……」

彼女はそう言うのと、さっさと部屋を出て行ってしまった。

聞きたいことはまだあったが……まあそれはいい。

今日はいろいろ突飛な事があって流石に疲れた。早めに寝て明日の業務とやらに備えるでしょう。

レオはそんなことを考えながら、ベットに横たわった。

——レイシア隊の隠家を周囲する謎の部隊の姿があった。

「——作戦指令室より各隊通達。当該施設に標的存在を観測手が確認、作戦をフェーズBへシフト、また正面入り口は施錠されている。ブリーチングを行われたし」

「——了解。待機中突入部隊は作戦行動を開始、施設にブリーチングで速やかに突入する」

「——後方支援部隊、配置完了。ガンシップ待機中、次の指示を待つ」

「――レイシスの子よ」

頭の中でその言葉が永遠と鳴り響いている。

漆黒のローブにその身を包み、人の形を彩った悪魔のようなアレが語りかけてくる。

なんども、なんども、それだけを言っっては。また消えていくのだ。

それに対して何故だか異様に惹かれる心の鼓動が、いつか止むのを待ちながら。

妙に魅了されているのが分かる、ただしそれは負の感情を伴いながら。

――怒り、悲しみ、絶望。そして復讐心。

だがしかし、もしかしたら。

そこに求めているような力の奔流が、そこにあるような気がしてならなくて

ただひたすら、それについて人は考えるのだ。

「――んあ……」

多少の頭痛を味わいながら目を覚めると、見覚えのない見新しい洒落た天井がそのぼやけた視界に見えはじめる。

「ああ、そういえば……」

廊下からノック音が聞こえてきた。

「――レオさん？おめざめですかー？」

ミーティア中尉の明るい声がドア越しに響いてくる、朝から実に心地よい声量で。

「あつ、ああ……いま丁度おきたところですよ……ええーと、中尉殿」

「ふふつ、そうですか！それじゃここにお召し物を置いておきますねー。支度が終わったら、ロビーの方にいらしてくださいね」

ミーティア中尉はそれだけを言い残すと、すぐにそこを去ったようだった。

レオはお召し物とやらを取りに、体を起こしてドアを開けに行く。するとそこには、軍服らしき物が置かれていた。

「まじか、軍服着るのか。なんだかそれっぽくなってきたな、こんな着替えまで用意してくれるとは随分親切なことだ」

今までのレオの服装と言えば、黒とか灰色。茶色の汚れの目立たない傭兵相応のカジュアルな服装をしていたばかりで、明るい色の服の格好というべきか、こういった正装には目が慣れず、これを着たところを想像したレオは、自身の見た目について不格好だろうなと感じていた。

服を取るとまずは洗面所で顔を洗う、そこで鏡面を見上げたレオは自身の髭の伸び具合を酷く気にする。

「あちゃー、こりゃキツイな。さすがにここに身の回り品の完備とかないよな……後で髭剃りとジェル手配してもらおう、あわよくば家庭用の髭剃りレーザーカッターの最新機種だな。あれはネット広告で見たが随分便利そうだった、いやていうか普通に出る時に支度の準備をさせてくれりゃ困る事もないんだが、それくらいの要望は応えてもらわ

んとな」

家庭用髭剃りレーザーカッター、通常のレーザー脱毛とは違い、単純に人体に傷がつかない出力のレーザーで毛を短くするだけのものだが、顔をスキャンすれば自動で指定範囲を勝手に剃ってくれる優れモノだ。

お召し物を順当に羽織っていき、最後に軍人らしい分厚いコートを羽織り終えると、レオはロビーに向かうことにした。

ロビーにやってくると、そこには私服のレイシア少佐とミーティア中尉がふつかふかのソファーに座って待っていた。

「――やあ、軍服がなかなか似合ってるじゃないか」

レイシア少佐にそう挨拶を受ける。

「どうも、ていうか少佐達は私服ですか」

「まあ、そりや私達はオフだからね。でも、君もなにぶん先日と同じ服で過ごすのもアレだろ？その軍服は別に強制させてるわけじゃないよ。それは官給品だが、君に十分な支度の時間を確保させられなかったせめてもの償いという奴だ、別に後で要らなくなったら闇市場にでも転売すればいいさ。その豪華な装いは共和国セントラル努めのエリート軍人を象徴するものだ、言い値が張るかも」

少佐はそう言うと、レオは呆れたような顔つきで少佐を見る。

「軍人が官給品横流しを容認とはね……」

「冗談だよ」

レイシア少佐はやや不機嫌そうな表情でそう言うと、レオを近くの椅子へと手招く。

レオは招かれるままに椅子に座ると窓に目をやる。

少佐はレオが席に着いたことを確認すると、早速話題を切り開く。

「さて、まずは昨日の続きについてだな。簡単に説明するのだが、我が共和国にも彼らのような覚醒者をのさばらせてない為の組織が当然あるわけだ。それを我々はイニシエーターと呼称し、今この時もさまざま戦地に趣き彼らと戦っている。敵国、レジオン帝国にはそんなならず者のような覚醒者による軍事組織が存在し、それらに所属している覚醒者はレイシスと呼ばれている。君が要塞で会ったという人物は、恐らくそのレジオン帝国のレイシスだろうと思う」

少佐は一通り言い終えると、コーヒーらしきものを上品に口に運んで一口飲む。

「なるほど？戦場の裏側の世界では、超人的な覚醒者達がお互いにしのぎを削って今の今まで拮抗して繰り広げってきたと」

「裏側というほど裏側の存在でもないがね、昔ほど一般にその存在は浸透していないのだ。なにせ我々が活躍していた全盛期の時代から数百年の時も流れたし、その世界大戦全盛期の時代と現代を比べれば、今の人類は余りにも平和を享受しすぎている」

「そうか、ん……？我々……？」

レオはその少佐の使った一人称の言葉に引っ掛かる。

「ああ、言ってなかったな。私もそのイニシエーターの一人なんだ」

レオはその言葉に衝撃を受けた、ただでさえ少佐は軍人をまともに務められるとは思えないような若い容姿をしているだけでなく、人外的存在の覚醒者でもあったのだ。

「少佐はイニシエーター……だったか」

少佐がそのイニシエーターだった、これが何を意味するのか。

それは、目の前の少女が俺なんかとは比べ物にならない程に戦闘の場数を踏んでおり、そしてあの例のレイシスとやらの化物を何人も相手にして来たということ。そして、今この場に普通に人と接して日常を送っているのだという事。

「恐れ入ったな……、本当は身近にありふれて居たのか。覚醒者は……」

少佐はレオの言葉に微笑しながら、再びコーヒーを一口、その口に運ぶ。

「それじゃあ、これも見せてあげよう。デイスパータの持つ武器は特殊でね、このソレイスと言う武器を我々は使うんだ」

そういうと彼女の手のひらから一本の剣が、空間から粒子を集めて形作っていく様に虚空からそれが突如生成される。

その剣は一級芸術品のように美しく煌めかせ、少し触れただけでも切り裂かれてしまいそうなほどに鋭い刃をしている。

そしてその剣を構える少佐の姿は、金色の豪華な装飾に相応しく美しい。

「この剣は、イニシエーターの扱う武器の中でも最も一般的な部類の武器だ。この剣の刃は非常に鋭利で、どんなに重装甲な鎧でも容易く切り裂く。我々覚醒者に流れる力『ヘラクロリアム』の力を余す事なく発揮することができる代物なんだ」

「――驚いたな……こりやもはや魔法だな。ふーん、ヘラクロリアム粒子ね……、教養のない俺ですら知っているごくごく有り触れた目に見えない空気みたいな物質だろ？よく分からんが、俺達が生命活動をする為にはなくてはならないものなんだとか、だがなんでそんなものが急に剣の形になったりするんだ？」

レオは少佐の生成し顕現させたそのソレイスを見つめながら、ふと疑問を投げる。

「ヘラクロリアムは、我々の精神的観念と密接な関係にあるのだ。かつてヘラクロリアムを研究した血のつながりのない我々の先祖とも呼ぶべき覚醒者達が、何かしらの身体的特異性を持つ自らの人体について調べ上げるにつれて、同時にこの特異性が人類の迫害対象にもなりえることを悟った。そこで、自らの自衛手段として確立させるものとして、先祖達は哲学的な様々な極限的思想。正と負の両面思想に行き着いた、正と負の極限的思想は、元々ヘラクロリアムが持ち合わせていた性質である精神感情的なエネルギーとの同調に強く結びつき、やがてヘラクロリアムとの驚異的な同調によって生じたエネルギーはより高次元のものへと昇華されていった。ヘラクロリアムのそのエネルギーは、その思想に適合するようにその姿を変えていった。自己を防衛するための観念、即ち武器だ。このソレイスは、人間が元来原始的に持ち得ていた防衛観念そのものの顕現なんだ」

少佐がそう長々しく語る姿に、見た目は人そのものだが。やはり人間とは根本的に違う生物なのかもしれないと、レオは良くも悪くもそう印象を強く受けた。

「小難しい話だが……要は原始的な防衛観念としての武器……、それが即ち当時の人にとっての一般的な剣という存在だったわけか、だからヘラクロリアムはその覚醒者達の願いに応えるようにその身を剣に変えていったと」
「まあ、そんなところだ。その精神は今の我々に引き継がれて、今も尚その姿を変質させている。だから、現代の今となっては剣だけとは限らず、様々なソレイスの形態が存在する。私の場合は普遍的な剣状のものだったというわけ
か」

そういつて少佐は、ソレイスを手の中に収めるようにその剣は姿を消していった。

「――まあ、我々の武器がソレイスだけでも限らんがな」

少佐はそう言うのと、鋭い目つきでレオを見つめる。

「まあそれはさておいて、本題に入るとしようか」

少佐がそう言うのと、ミーティア中尉が軍隊専用モデルのモバイル端末を取り出し、それをレオに手渡す。

「――北方のヌレイ戦線から独立機動部隊宛てに救援要請が来ています。まずレオさんは着任後初任務として、北方に居る我がレイシア隊の本体と合流し、ヌレイ戦線にて合流して頂きます。その後我が独立機動部隊は、その機動性を活かす形で前線のアンバラル条約機構共和国軍参加し、前線の共和国軍を支援致します」

ミーティア中尉が簡単に作戦の説明を終えると、初回からいきなりござっての戦場に派遣される事について思

わずレオは苦い顔をする。

「うわ……すごいな。初任務から早速前線行きとはね……さすがですね……いやあれじゃあ先が思いやられる……」

レオはその作戦要項が書かれた端末のディスプレイを見て唸る。

「れっ、レオさんならきつと大丈夫です！ なんとたつて英雄の傭兵さんなんですから……！」

彼女は笑顔でそう言い放つ。

「あはは……、まあ独立機動部隊？ とかいう大層な名前だけの事はあるって感じか……、具体的な運用は全く知りませんけど、身に染みて味わうしかなさそうだ」

傭兵業は企業紛争や軍閥闘争でよく起用されるその性質上、がつつりとした国単位での正規兵同士の戦場には余り参加する機会はない。というか、紛争はあれど軍戦略単位での戦闘が行われることは近代に入ってから滅多になくなった。

なので今回の戦線での任務とやらもそこまでエネルギーを消費するモノではないと思うが、如何せんほぼ未経験の地。腕前には自信があるとはいえ、正規兵を侮らないようにしなければならない。

ミーティア中尉による初の作戦説明の会議は終わり、さつそく三日後には戦線に向けて出撃することになった。初任務から戦場送りとは鬼畜極まるが、これも自分が選んだ道だ。

当然、最後までやり通す。

出撃の間までは特にやることもないので、ブランクの穴埋めをすべく、リハビリでもして過ごすことにした。

「しっかし広いなあここは……ここが隠れ屋ねえ。それに、児童施設と併設とは、なんというか。色々な思惑を感じてなんだか、悪趣味だ」

この施設の外回りに取り付けられているバルコニーからは、第Ⅱセクター、ステーションの巨大な建造物が見える。

下部構造には共和国全土へとアクセスするいくつもの列車の路線が張り巡らされていて、一日中輸送列車が稼働しつづけ都市を騒音で満たしている。

上部構造には空港ターミナル、軍の空軍施設も併設で存在していて、そこから放たれ活発に出入りする航空機の航行灯がどこからでも拝められる。

かつての共和国領から流入した数億人にも及ぶ下町セクターの巨住民。

あそこはいつも賑やかだ、こんなところに戦火の火が灯ることなんて事はきつとあつてはならないのだろう。

——各都市には人口の流入限度が決められ、それ以上の人数が入ろうとすると規制がかかり、その都市にそれ以上の民間人が入ることができなくなる。そのためここセクターが管轄する区画に逃げ込めなかった、レオのような人々は戦線の外側に住み着くしかなくなる。

なので、付近の戦線から逃れてくる民間人の中には轟音の鳴り響く迎撃城塞のすぐ外で暮らしている者もいる。

そんな現状に中央共和国政府は関心すらもたず事実上の放置、見かねた軍の将官達は次々に企業の如く軍閥を設立し、やがてはアンバラル第三共和国のような巨大軍閥も生まれたのだ。

「秩序保全が入れ乱れるこのご時世。こんな平和そうな都市部が、いつ戦場になっても、実際おかしくはないんだな……」

広大な都市の人工物が放つ美しき夜景を見ながら、レオは一人でそう呟く。

謎の部隊が展開し施設を取り囲んでいる。

本部とのやり取りからは配置の完了と、現場部隊突入の合図が待たれていた。

「――合図をしたら突撃する。傭兵レオ・フレイムスは、発見次第最優先で確保。それ以外は排除しても構わない」
少佐達の静寂な夜が、乱されようとしていた。

――都市の放つ壮大な人工光の夜景を後にし、レオは部屋へ向かう。

「明日からはどんな生活が始まるのやら、できればミーティアさんに直接起こしに来てもらいたいものだが」
いい歳してくだらないことにうつつを抜かす事、それが今は何とも心地よく感じた。そんな矮小な期待を胸に秘めた時だった。

突如、かつて聞きなれたものとよく似た大きな爆破音が施設内に響き渡る。

「……な、なんだ?! この短い爆音……ブリーチングチャージか……? 音は……施設を囲むようにほぼ同時に衝撃と音が伝わってきた。まずいな、このタイミングで敵襲とはね、しかもかなり手際が良さそうだ。正規兵かねこれは……とりあえずまずは、少佐達との合流が先決か」

爆発音が聞こえた後、すぐさま階段を駆け下りロビー階の少佐たちがいるであろうと思われる所に向かった。

ロビー階の中央廊下を挟んだ向かい側の通路へ渡ろうとしたその時、目の前を深青の弾道が横切った。

「うっわあぶねえ、当たりそうだった……」

壁を背にしてロビー内の状況を伺う、すると視線の先のロビー階入り口付近は、既に敵が統率の取れた様子で散開していた。

こちらの存在に気付いている敵兵はフラッシュライトを壁越しに当ててこようとする。

「――そこにいるのは分かっている!!! 直ちに武装を解除し、ゆっくり前に出てこい!!!」

敵の様子を見るにどうやら殺す気はまずは無さそうだが、この襲撃にはまるで心当たりはない。

何かの間違いだろうとは思うが、かといってこのまま出て行くのは愚策中の愚策でもあるだろう。

敵の目的が全くわからない以上、下手な真似はできそうにない。

「クソ、何人いんだこりゃ……」

「――レオ・フレイムス! 無事か!!!」

「ご無事ですか!？」

先程渡ろうとした向かい側廊下から、少佐達の声が聞こえてる。そちらを見ると息の荒くなった少佐とミーティア中尉の姿があった。

「少佐! いったいこれはなんなんですかねえ……! 身に覚えないですけど」

「話はあとだ! まずはこちらから離れるぞ、地下に武器庫がある。君がいま来た道をそのまま戻って階段を更に降りろ、その先で合流できる!」

「ふう、了解です少佐!」

「レオさん! ご無事で!」

敵兵の投降を呼びかける声で少佐達の声が所々掻き消される中、なんとか言われた通りの来た道に戻る。

近くに慌ただしい敵兵と思われる足音が聞こえてくるが、意に止めないまま振り切って先程の階段をそのまま下っていく。

すると、やがて頑丈そうな扉のついた部屋に行き着き、その手前には別ルートからやって来た少佐達の姿があった。

「来たか、中に入るぞ」

そう言った少佐がIDカードのようなものをパネルに翳し扉を開ける、中は真っ暗だったが急いでその場の全員は部屋に入り込む。

扉が閉められロックするような音が鳴り響くと、ほぼ同時に部屋の明かりが手間へから奥側へと順々に点灯していく。

灯りに照らされたその空間の様子は、まさしく少佐が言った通りの武器と弾薬の宝庫である武器庫だった。

「武器は共和国製だが最新式の Σ シリーズは取り揃えている、好みは分かんが好きなものを持っていけ」

少佐の言う通り、ここにある武器は全て共和国正規軍の使用する武器種ばかりが揃えられていた。

共和国軍の採用しているAEライフルAE-64は、AE弾と呼ばれるカプセル型プラズマ弾を使用する。

このAE弾は穿孔性能が極めて高く、高性能な防衛機構が存在しない軽歩兵の着用する対物理の複合アーマー程度なら容易く着弾時のプラズマ化で無効化してしまう。

更には瞬間的に発生する熱によって空気が膨張し、その衝撃波によって臓器を壊滅させせる事が出来てしまう。

こんな代物が歩兵に平気で大量に持たせられている、旧時代の装甲兵器系を大量にお蔵入りさせた張本人だ。

他にも軍規格のコンバットナイフ、マシンピストル等があり、防 Σ 弾特殊電子線装甲チョッキなんてものもあった。

これはVIPですら滅多に着用する事が出来ない最新型の対AE弾用チョッキであり、内部の磁器発生装置によって着弾するプラズマ弾を偏向させ威力を減衰させるものだ。ただしこの装置は精密機械である上に衝撃波は防げないので、数発撃たれば簡単に耐久性が限界を迎える。

だがそうは言っても気休め程度であっても断然ないよりはましであることは確かだ、レオやミーティア中尉はそ

れらを一通り拝借して身に着け、装備を整える。

「さてここからのプランだが、まずは当然足がある。ここには地下ガレージに緊急時用の装甲機動車が止めてある。それを使うしかないが……」

少佐がそう言ってる最中に、ミーティア中尉のぼやいた声が聞こえてくる。

「子供たちがいない時でよかった……」

ミーティア中尉は安堵の息を吐く。

「たしかに？ガキどもが居たら奴らから逃れるのはキツかったな。まあなんでこんなところに併設する形で隠し基地があるのかは聞かないでおくが」

レオはそれに便乗して嫌味混じりの言葉を放った。

「えっ、ええと……」

ミーティア中尉が言葉に詰まるが、少佐が中尉の肩を叩いて彼女の前にでる。

「別に好んで我々もここに基地を構えたわけじゃない、あの子供たちは孤児だが事情が特殊なんだ。いつしか覚醒者として覚醒する可能性を秘めた潜在孤児として集められている、我々はそのついでの制御的監視者でしかない。我々に予算をあてがう上層部だって馬鹿じゃない、このご時世ではこのような基地を構える事とは、常に複合的な要因と目的や戦略が付きまとう。独立機動部隊としてその例外ではないのだ」

ミーティア中尉を庇うように少佐がそう言うと、レオは静かに頷いた。

「で、話の続きだが。装甲機動車ならこの先のガレージにある、ただ当然敵も手を回しているだろう、つまりは道中の交戦は避けられないと考える。準備はいいか？」

少佐がレオやミーティア中尉に視線を送り、そう聞く。

「当然」

「いけます！」

タイミングを同じくして二人は返事をする、少佐はガレージのある方向の扉を開ける。

二人がガレージに続く通路へと出るのを確認し自らも出て、外側の扉に付いているスイッチを押した。すると扉が自動で閉じると同時に、武器内に突如炎が燃え盛り始める。

武器自動廃棄システムのようなのだ。

武器庫からガレージに続く通路を抜け、ガレージにつく……。だが、そこにはやはり少佐の読み通り敵兵が既に配置され、ガレージ内は占領されていた。

その様子を恐る恐る忍び足で確認しにいった少佐とそれに付いていくレオと中尉だったが、こちらを不意に見た敵兵によってその行動が気づかれてしまう。

「見つかった！一旦遮蔽になる通路まで戻れ！！！」

遮蔽の無いガレージへの一方通行の通路を銃弾の雨に晒されながら来た道に戻る、弾道が頬をかすりレオは九死

に一生を得た。

「ちよっ！なにやってんすか少佐！？敵にバレるなんて！？」

「す、すまない。ガレージの浅い警備だった故に穩便にいけそうだと思ったんだが……」

「なにを今更穩便などと……」

レオがそう言うと、少佐は複雑そうな感情を持ち得た表情を受かべていた。

（敵は見た感じ、少佐達と同じ共和国軍の兵士のようなようだ。少佐はそれに躊躇しているのか？）

「――大人しく手を挙げてゆっくり出てこい、武装解除が認められれば命は保証する！！！」

こちらに気づいたガレージの敵兵達は、説得力のない降伏勧告を告げてくる。

「これは出てったら間違いない撃たれますよね……」

ミーティア中尉も同様に複雑そうな表情をしながら、レッグホルスターから抜いた武器を構える。

「少佐、さすがにこの道じゃ蜂の巣にされる。挟み込まれる前に別ルートで脱出できないか？」

レオは少佐に提案する。

「いや、それは無理だ。ほかに道はない」

「じゃあどうする？やるってなら足掻くが」

「いや、その心配はいらない。私が先陣を切る、中尉達は援護を頼む」

「……いけるのか？少佐」

「まあ、見ている」

少佐はそう言うと、突如右手の手の平を上向きに出す。

レオはその光景を何事かとみるが、その動作の後すぐに空気がそこに収束するような風の流れを周囲から感じた。周囲のそれを目で追うと、それは少佐の先ほどの手のひらに向かって行っているのが分かった。

そして徐々に、その風の流れは可視化されていきやがてハッキリとした像が見え始める。

その像は両刃の細身のつるぎのような姿を見せ始め、その具体像は手のひらから切っ先へと順に具現化されていく。

気づけば僅か数秒の内に、手品のように剣をその虚空とも言えるような場所から出現させた。

その光景にレオは思わず目を見開く。

少佐は、その剣を片手に握み凄まじい速度で敵集団に突っ込んでいく。

それに思わずレオは手を指し伸ばしそうになるが、それをミーティア中尉が手を伸ばしレオの手を静止させた。

「大丈夫ですよレオさん。少佐は強いんですから」

ミーティア中尉がそう言ってほくそ笑む。

敵集団に突っ込んでいった少佐は、常識では考えられないような軌道を描き、その並外れた身体能力で敵の放つ弾

丸の雨の中を華麗に通り返ける。

弾丸はただの一発も当たることなく、その光景はまるで銃弾が少佐という存在を避けていくかのようだった。

少佐はそうやってあつという間に次々と敵の間合いに入ると、容赦なくその剣を振りかざし、敵兵。本来であれば友軍の立場であろうその兵士を迷いなく切り捨てる。

「――き、距離を取れ！！間合いに入れるなあ！！！」

敵兵たちは少佐から距離をとり包囲しようとするが、少佐はその隙を与えなかった。

目に追えぬ速さで剣を捻り、回転させて周りの敵を刺し込んで切り刻む。

気づけば、少佐はガレージ内の敵をレオが息もつかせぬ間に制圧していた。

「な、なんてことだ……これが覚醒者の力なのか……？」

決して人の身では到達することのできないその領域を、まじまじとレオは見せつけられた。

少佐のその圧倒的な実力はレオにただ傍観する事を強制させるかのようなものだ。

援護など、まるで必要がない。

開いた口がふさがらないとはまさにこのことであり、改めてかつてのあの光景は幻想ではなかったとレオは確信した。

レオはいつまでも少佐の事を啞然とするように見続けていた。

それに気づいた少佐は思わず溜息を吐く。

「はあ、見惚れるのもいいが……まずはこれを見てほしい」

そういつて少佐は、死んだ敵兵士のアーマーを持ち上げる。

「それは、やはり共和国軍のアーマーか……？」

レオは持ち上げられたその見覚えのあるアーマーについて答えた。

「そうだ、我々を現在襲っているのは敵国の特殊工作部隊や傭兵、ましてやテロリストでもない、同胞たる友軍だ。申し訳ない話だが、先ほどの私は彼らを倒すことに躊躇していた。すまない」

少佐はそう短く謝罪すると、その持ち上げたアーマーをその場に放して落とす。

「まあ察しはついてたが、こんな秘密基地のお手本じみた急襲。ただのテロリストや傭兵なんかにはできるとは思えなかったよ、やり方が明らかに俺達と違うからな。これはあまりにも上品すぎる」

レオはそう言うと、ミーティア中尉が頷く。

「少佐、これは……いったいどういう事なのでしょう……。我々を襲うにしても少佐の存在は掘んでいたはずですし……」

ミーティア中尉の問いかけに、少佐も顎に手をやって考えに耽る仕草をする。

「中尉、言いたいことは分かる。明らかに敵の戦力不足は否めない、だが今は詮索している時間がない。何が起きているのか分からない以上、とにかくここから出るのが先決だ」

そういつて少佐は振り返り、装甲機車の様子を見に行く。

「やつらの工具が取りついているが……、まだ無力化される前だったようだ。動かせるぞ、中尉。運転を頼む」

「了解です少佐！」

少佐は装甲機車の車輪に取り付けられていたロックをその剣で手際よく破壊すると、ミーティア中尉は運転席頭上のハッチから乗り込む。

すると装甲車の後ろのハッチが開かれレオはそのまま乗り込んだ、すると運転席の方で何やら焦る様にミーティア中尉がパネルを必死に弄る姿が見えた。

「少佐！ 認証が書き換えられています！ このままではシャッターが開きません！」

「どうやらガレージシャッターが応答しないようだった。」

「では無理矢理にでも開けるまでだ」

少佐はそう言つて、閉じた出口に向かって手をかざす、すると少佐は何かをその手に込めるように目を閉ざした。次の瞬間、重厚そうなガレージシャッターに装甲車が丸々通れるくらいの円状の穴が突如空く。

「……なんでもありつて感じか？」

レオはそう言葉を漏らす。

「さすがです少佐！」

ミーティア中尉がそう言つた後、少佐はレオと同じように装甲車に急いで乗り込む。

そして装甲車は少佐が開けた穴を通りガレージを颯爽と出た、その瞬間入れ替わるようにして出口付近の追っ手の車両を追い抜く。

「ふう、なんとか……」

ミーティア中尉はそう束の間の安堵する。

「中尉、セクターターミナルに向かつてくれ。今からゼンベルと連絡を取り今すぐガンシップを動かせるように連絡する」

「了解です少佐ー！！！」

ミーティア中尉はそう言われて装甲車のギアをあげると車両は急加速し、慣性に従って少佐とレオは背を壁にぶつける。

少佐は「やれやれ」と言いつつ、通信機器端末を胸ポケットから取り出した。

――同刻。

「――アウレンツ大佐！――」報告いたします！裏口の警戒に当たっていたフィアットの分隊が全滅、装甲機動車に乗ってターミナル方面に逃走した模様です」

その兵士はある男、アウレンツ大佐の前でそう報告を上げる。

「——ふうむ、やはりこの程度では仕留められんか。さすがレイシア少佐と言った所かねえ。コード〇を発動する、アストレア級ガンシップで追撃しなさい。市街地区画での兵装使用を許可する、ここは徹底的に追い込まんとねえ……」

その男はにやけ顔でその兵士に命令を下した。

兵士たちはその上官の命令と振る舞いに普段との違和感を感じつつも、兵士たちはただ忠実に与えられた役割をこなしていくのみだった。

——雨音に混じりながら少女の声が聞こえてくる。

昨日は徹夜で酒を盛ったせいか覚醒しようとする、重たい頭痛と睡眠に常に襲われる。

そんな風にボーッとしながらも、声がやってくる方へと耳を辛うじて傾ける。

「——おい！！聞こえるかゼンベル！！おいゼンベル！！応答しろ！！」

少女、いや。少佐のどなり声だ、その華奢な声音はガンシップ内に鳴り響いていく。

少佐からの連絡だと分かった、急いで端末を焦った手つきで手に取る。

「——んああ……どうしたんですかい少佐……予定時刻よりまだ随分早いですぜえ……あつレフティア大尉みたいなおつかいか勘弁ですよ……ふああ……」

「寝ぼけてる場合じゃないぞゼンベル。目的不明の共和国軍部隊の強襲を受けた、敵の所属は分からない。とりあえ

ず緊急事態だ、ヘリをいつでも飛ばせる状態にしておけ、今そっちに向かつてる」

「な、なんですと！？一体なにがあっただんですかい！？」

「詳しい話は後だ、追撃されている。ターミナル上層停留所で合流だ」

「少佐、後方からガンシップ来ます！」

ミーティア中尉はサイドミラーで後方から迫りくる近接航空支援機 VTOL ガンシップの存在を目視で確認する。

「フル装備のガンシップを市中によこして来るとは、随分手間をかけてくるじゃないか。このまま逃がさせてはくれないさそうだな。レオ、ハッチを開ける。私があれを落とす」

「正気か！？ガンシップだぞ！？」

「大丈夫だ、任せろ」

少佐からレオに向けられたその眼差しからは、日常茶飯事の如くこの程度の困難は乗り越えてきたかのように、強者特有の自信に溢れんばかりで、その姿勢はレオの身にもしみじみと感じとれる。

「まじかよ、ほらよ」

レオはハッチを開けると、そこから少佐が身を乗り出し、走行中の装甲車の上に堂々と立つ。

そのまま少佐はガンシップを迎え撃つ為の姿勢を構える。

「……おいおい、ほんとうに大丈夫か？いくらイニシエーターとやらといっても近代兵器のガンシップ相手には無謀なんじゃないか……」

レオは運転席のミーティア中尉に聞こえるようにそう言う。

「大丈夫ですよレオさん、少佐の力を信じてください」

後方よりガンシップが少佐からはつきり見える距離に現れる。

ガンシップは武装に誘導型対地ミサイル、対人AEM機関砲を標準武装としている。

その機関砲の威力は大戦時由来の規格を受け継いでおり、対人を想定していたとは思えない火力を誇る。

軽装甲の車両なら数十発で原型を失うに足るだろう。

対地ミサイルもこれまた穿孔性能の高いミサイルを採用し、重装甲車両であっても直撃すれば特段対策を行っていない金属装甲には簡単に穴が空き、そのまま内部に直進したミサイルは火花を散らしながら内側の人間を焼き殺す。

また同時に対象物体に限定して強力な電磁波を発生させる爆薬発電機を備えた電磁波爆弾との融合型でもあり、大抵の車両は直撃すれば電子機器系統の基盤が破壊され致命傷となりうる。

大戦時代からの古典的な兵器でありながら未だ最強格の武装だ。

「――フェーズ1、標的補足。対地ミサイルを使用する、ロックオン完了。発射」
「――フェーズ2、発射」

追撃に來た2機のガンシップからそれぞれミサイルが発射される。

「やばいつて！当たる当たる！！」

レオはこちらに真っ直ぐ直進するミサイルをその視界に捉えると、思わず目をつぶった。
しかし、何かが破壊される衝撃波が外から伝わってきた。

慌てて後方を見るが、飛来して来ていたはずのミサイルの姿がない。

「ど、どうなった……少佐は無事か？」

レオは急いでハッチをよじ登り、すぐに少佐の安否を確認する。

だがそれは杞憂であった。

そこには平然とした無傷の少佐の姿があり、改めて生物としての次元の違いを見せつけられる。

「……ミサイルはどうなった？」

「普通に弾いた。直撃でなくても付近に着弾するのはマズイからな、あとは目障りなガンシップを落とすだけ。友軍

機を落とすのは少々気に障るが、まあやらねばこちらが死ぬ」

少佐はガンシップに向けて手をかざす。

「おい、まさか……」

少佐が手をかざしたとき、2機のガンシップの周りの空間が歪むように辺りの光が変化する。

歪んだ空間は綺麗な円を描き、まるで絵の中の空を丸く切り取るかのよう。

その円によってガンシップの両脇に抱えている推進補助スラスタが綺麗に取り外され、推進力が不安定になった2機のガンシップはゆらゆらと高度を下げていく。

「その技、強すぎでは？」

「そうか？まあ応用がかなり効くし便利ではある」

少佐はそう言って、ハッチを通じて装甲車内に戻った。

——同刻。

少佐達の隠し基地付近に臨時設置された司令部のテント内にて、アウレンツ大佐は追撃状況の各種情報をオペレーター達から受けていた。

「——追撃にあたっていたガンシップ2機が航行不能、撃墜されました」

「――他分隊が装甲機動車で現在追跡中、しかしこのままでは先にターミナルに到着されます」

「ほう、では現地の SUPRA 隊を出動させる。奴らは空港に待たせてるガンシップと合流してここから逃げるつもりだろう。都市から逃せばそれ以上は追えん、機体は撃墜して構わん」

「少佐！空港が見えてきました！」

「もうすぐだな、この先の要人用連絡道路を曲がってくれ」

ターミナル上層へと続く要人連絡道路のフェンスゲートの前にやってきた。

警備兵達が近づいてきたが、少佐達は顔が利くのかそのまま特に検査を受ける事無く通過することができた。

通り抜けた先はいくつもの要人専用機と思わしき機体がいくつも並んであった。

どうやら民間が使用する飛行機の区画はここからは遠く離れているようだ。

すれ違う多くの要人やその護衛達がこつちを不信そうに目を追ってこちらをみている。

それもそのはず、こんな厳つい軍事車両が要人エリアに踏み込んでいたら誰しも不安になるだろう。

しばらくすると追撃しに来ていた先ほどのガンシップと同様の形状をした機体の前で、こちらに手を振っている大柄の男が車内から見えてきた。

「少佐！ゼンベルさんです！」

「よし、近くに止めてくれ」

ガンシップの近くに乗ってきた車両を止め、少佐たちが降りると大男が大声で寄ってくる。

「少佐ア！！ご無事でえなにより！！ガッハハハ！」

「ああ、なんとかな」

むさ苦しい第一声を終えると、その大男は冷静な態度に急変し、レオの方に歩み寄ってくる。

「こちらが例の傭兵ですな？」

そのゼンベルと呼ばれている大男に、レオは声を掛けられる。

「あつ、ああ。俺はレオ・フレイムスだ、数日後から本格的にお世話になる予定だったんだが……」

「おお！！レオ・フレイムス！歓迎するぞ！俺のことはゼンベルと呼んでくれえ！！」

いきなり静かになったと思った矢先、ゼンベルは大笑いしながら元氣よく手を差し延ばしてきた。

ゼンベルは大声通りの大柄で体格が良い大男だ。

どうやら軍服を着ておらずかなりラフな様子で、一枚きりのシャツのような上着に作業服のようなズボン。

傍から見ればヒゲの生やしたただのおっさんに見えるが、本当に軍人なのかは分からない。

「挨拶は終わったか？ここを離れるぞ」

「了解したあ！！いつでも出せるぜえ！乗ってくれい！！！」

ゼンベルはそう言って颯爽に操縦席へと着く、そして少佐とレオも乗り込むが、ミーティア中尉は搭乗しなかった。

「どうした中尉？行かないのか？」

レオがそう聞くと、少佐が横からそれに答える。

「ミーティア中尉には、彼女なりの役目がある。私の部隊の一員でもあると同時に共和国防衛省の直轄諜報部をも兼任しているんだ。今何が起きているのか、その真相を探る為の要員は残しておかなければならない」

レオは少佐にそう言われるが、素直には納得し難いものだった。

「いやいや！さすがにこの状況で一人置いてくのはまずいでしょ少佐！」

「――レオさん」

レオの言葉に被せるように、ミーティア中尉がそうレオの名を言う。

「私なら大丈夫です、少佐たちと早く行ってください」

ミーティア中尉にそう言われ、レオは言葉を失う。

「そう、か……」

ミーティア中尉は真剣な眼差しで、レオの手を取る。

「私には私なりの部隊での役目があります。どうか行ってください。そしてまた向こうで会いましょう。大丈夫です、どうか信じて。他の部隊のうちの子達ともよろしくやってくださいね」

そうミーティア中尉は言い残していくとレオの手を離し、ガンシップから駆け足で離れていく。

「おい？もういいか？早く出ねえとマズイことになりそうだぜ」

入ってきた通路側の出入り口から軍事車両が入ってくる。間違いなく先ほどの追っ手だろう。

「ゼンベル、発進だ」

少佐のその号令と共に、ガンシップは勢いよく停留所から飛び出していった。

開いた窓からは俺たちを見送る中尉が見え、彼女はこちらに軽く手を振った。

やがて航空機発着場を出ると……。

「おい、おいおいおい待てよ！？嘘だろ……、どういうこつたよありや……」

「どうしたんだゼンベル」

ゼンベルの声に少佐はすぐに駆けつける。

「少佐、アレ。見てくませえ……、敵さんのパフォーマンスにしちゃ少々過激すぎやしませんかねえ……」

ゼンベルはその方向に指を指し、少佐もそれを見る。

「……ゼノフレームか？」

黒色の独特のシルエットデザインを見せるゼノフレームが、滑走路離陸地点付近で待機していることが目視で確認できる。

ゼノフレームは平均して全高約10メートル前後の二脚又は四脚等の多様な形態を持つ汎用型高機動戦車であり数百年前の大戦中に開発された通称・戦略決戦兵器である。

かつてゼノフレームは、古の戦場に置いてその戦術的優位性が極めて高いことから、大戦時に大量生産された主力兵器であり、非常に猛威を振るった戦略兵器である。

現在となつては、その運用コストが小国の国家予算が軽く蒸発するほど悲惨なことから、次なる大戦に備えるという名目でほぼ全てのゼノフレームが凍結され、仮に運用を開始するにしても二週間にわたる複雑な凍結解除作業を行わなければならない。

そして、その弊害として長年全く使われなかったゼノフレームに関する超高度技術者が不足しはじめ、その極めて複雑な機構兵器であることからロストテクノロジーとなりつつある側面が現れ始めている。

ゼノフレームの中にはヴァルランド砲とよばれる兵装が存在し、強力な何かしらのエネルギー弾である事は分かっている物の、着弾後の数週間にわたる致死性の高い未知の物質が拡散されている事から使用が禁止され、遂には解明されないまま今に至っているようなものである。

大戦時の人々の生活を犠牲にし、それで得た熱狂的な技術革新が齎した負の遺産の一つだ。

基本武装としてプラズマキャノン砲や高度自動迎撃レーザー、対ゼノフレーム近接戦用ブレード等があるが、その

どれも汎用的に通用しうる一線級の代物。

仮に広域対空砲が換装されていた場合は、離脱する前にほぼ間違いなく撃墜される。

「まずいな、あれが本当に噂通り動くってんなら。ここから出るのは不可能だぜ……」

深刻な表情をゼンベルは浮かべる。

「どうすんだ？一回もどるか？」

「……いや、このまま対空網を突っ走る。ゼンベル、頼んだぞ」

一瞬神妙な顔を見せた少佐だったが、即座に強硬突破する手段を選んだ。

「よし！承知したあー！！！！」

ゼンベルが活きのいい返事をするが、状況についていけないレオはただ絶句をする。

「……ゼノフレーム。いままで封印されてたって代物が急に元気よく動作するのかね？あれは俺達をここから逃がさない為の時間稼ぎかなんかじゃないか？」

「当然、その可能性はあるが。事態を観観的に捉えるのは危険だ、あれは正常に動作するという前提で決行するぞ」

「任せとけえ少佐！要は当たらなきゃいいんだよねあ？」

ゼンベルは自信満々にそう言う。

「おい、さすがにそんな事は無茶だと俺でも分かるぞ。当然磁気誘導性ミサイルの一つや二つは飛んでくる。操縦云々で解決できる話だとは思えないが？」

レオはそう言って少佐の方をみる。

「当然、私が防衛を担当するのさ」

少佐はそう言った後、ガンシップはスラスタ出力を全開にし、勢いよく空域外へ向かおうとする。しかし案の定、火器管制レーダーの警戒警報が鳴る。

「くるぞおー!!!」

ゼノフレームは正常に起動していた、それからミサイル第一波がゼノフレームから飛来する。

「ちっ、よりによって対空特化装備かよ……!」

ゼンベルはそう言いながら、ガンシップは全速力でゼノフレーム頭上から地面すれすれの低空で駆け抜け、ガンシップは軽快に不規則回避運動をし、発射されたミサイルをタイミングよく回避させる。

ガンシップに当たらなかったミサイルはそのまま滑走路地面に着弾し第一波を華麗に捌く。

「攪乱チャフを使わずにこのミサイルの量を避けたのか？信じられない腕前だな」

レオはゼンベルの航空操縦の尋常ではない腕前に関心する。

「当然、パイロットの実力を舐めるなよお？」

第一波を回避すると直ちにゼノフレームからは第二波対空ミサイルが発射される。その数はおよそ倍であるため、回避行動だけでは間違いなく直撃する。

「チャフとフレアを使う!!!」

——もはやこの状況は最悪だと思っていた。

だが、今までにはなかったような強力な仲間たちと出会い、レオは最後の最後まで味方の腕を信じた。今までの傭兵生活から考えられないような味方を頼るという行為を、レオは無心の内に行っていたのだ。

「どうしたレオ・フレイムス！怖気付いたか？」

少佐は少女らしい微笑みを浮かべせながらこちらに問うた。

「ま、まさか。楽しくなってきたところですよ」

レオはそう全然楽しくなさそうに無表情でそう言う、実のところ心では強がっていてもこの圧倒的な緊迫感の迫る恐怖に体は抗えていなかった。

ガンシップはミサイルの大波に飲まれそうになる。

ゼンベルが攪乱チャフ、フレアを放出し、ミサイルの機動があらゆる方向に逸れていく、しかしその最中に更なるミサイルの追撃がゼノフレームから行われる。

第三派だ。

「どんなに急いでも第三波からは逃れられねえ！！！少佐ア！後はたのんます！！！」

少佐はゼンベルにそう言われると、ガンシップの扉に手をつける。

「出番だな。君は手すりに掴まって放り出されないようにしろ」

「えっ、それはどういう……」

ガンシップの側面扉が少佐によって開かれる。

強い雨風が吹き荒れている中、少佐は身を乗り出し後方から迫り来る第三波を視認する。

「さてと」

少佐は航行中のガンシップの上部に登り、手の平から剣を顕現させる。そして第三派ミサイル群に狙いを定めるかのように剣を大きく掲げる。

【アンセル……！】

その剣からは真つ白な閃光がガンシップをも包み込むとばかりに周囲に放たれる。

その閃光は強大な剣のように切っ先を伸ばし、ミサイル群を振り払うようにその閃光は放たれた。

それに触れたミサイル群は次々に破壊されていき、やがて第三派ミサイル群は消滅する。

レオはそれによって視界を奪われるが、しばらくすると閃光は止み周りが徐々によく見えるようになった。機体には異常がなく、衝撃波も感じなかった。

「一体なんなんだ……？」

レオがそう口になると、心底疲弊した様子の少佐がガンシップ内に戻ってきた。

「まあ、ちょっとした飛び道具だよ……」

少佐はそう言うのと、ガンシップ内の床に背を倒す。

その様子を見たレオは急いで駆け寄った。

「おい少佐！大丈夫か！？」

「平気だ……、ただ。少し頑張りすぎた……」

息の荒い少佐の様子に、レオは少佐の額に手を当てる。

「すごい熱だ……！ゼンベル！少佐の様子がおかしい！どうすればいい！？」

少佐は意識を朦朧としていたようだった、レオは操縦席の方に向かって声を挙げる。

「ヘラクロリアムを放出しすぎたんだ！、とりあえず飲み物なんかで体を冷やしてやれ！」

ゼンベルが大声でそう返す。

「ああ！分かった！」

そう言つてレオは、救急キット近くに置かれていた小型冷蔵庫を開け、大量の冷えた缶飲料を取り出す。

「んだこれ！全部ビールかよ！？」

そう言いながら缶を少佐の体中に当てるように配置する。

「とりあえずこれで……、にしても絵ずらが犯罪級だなこれは」

すると、少佐は徐々に目を開ける。

「くっ……、すまない。意識を失ってしまったようだな」

少佐はそう言うと、身体を起き上がらせる。

「おいおい、あんま無理しないでくださいよ少佐」

レオはそう言うと、少佐は近くの缶ビールを見つめそれを手に取る。

「大丈夫だ、こう見えても私達の体はかなり丈夫だ。ちよつとしたことではどうということはない」

少佐はそう言うと立ち上がる。

「さて、ゼンベル。少し早いが、予定通りに北方戦線に向かつてくれ。私は今から今回の襲撃について何が起きてるか本部に状況を確認する」

「了解です、少佐ア」

こんな危機的状況を過ごしたすぐ後にも関わらず勝利の余韻に浸らない少佐を見て、どんな世界を生きてきたのか想像がつかなかった。

価値観とか、住む世界が違うなんてものではない。

少佐とレオとの間には明らかに壁がある。

それは、決して超えることの出来ない生物としての隔たりなのだ。

——同刻。

「まさかあのゼノフレームの対空網から抜け出すとはねえ、少し予定と違うが、まあいい。何れにしろ彼らはヌレイ戦線へと向かうだろう。面倒だがそこで直接、奴を回収できればそれでよい……。もうこの体に要はない」

アウレンツ大佐はそう言って、司令部からは姿を暗ました。